富山市埋蔵文化財調査報告20

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ

—水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・鍛冶町遺跡—

2007

富山市教育委員会

上＝宮町遺跡全景（西から）　下＝SE19遺物出土状況（東から）

上＝水橋専光寺遺跡全景（西から）　下＝鍛冶町遺跡完堀（西から）

富山市埋蔵文化財調査報告20

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ

—水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・鍛冶町遺跡—

2007

富山市教育委員会

例　言

1　本書は個人住宅建築に先立つ平成18年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、富山市教育委員会が主体となって実施した。調査費用については富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付をうけた。
3　本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・整理作業期間及び発掘調査面積は次のとおりである。

水橋専光寺遺跡　　発掘作業：平成18年6月14日～平成18年7月5日　　164㎡
（富山市水橋上条新町地内）　整理等作業：平成18年7月6日～平成19年3月30日

宮町遺跡　　発掘作業：平成18年10月30日～平成18年11月30日　　103.5㎡
（富山市宮町地内）　　整理等作業：平成18年12月1日～平成19年3月30日

籠沢町遺跡　　発掘作業：平成18年12月11日～平成18年12月15日　　23.7㎡
（富山市婦中町長沢地内）　整理等作業：平成18年12月18日～平成19年3月30日

4　調査担当者

水橋専光寺遺跡	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	主任	細辻嘉門	嘱託　久保浩一郎
宮町遺跡	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	主任	細辻嘉門	嘱託　安達志津
籠沢町遺跡	富山市教育委員会埋蔵文化財センター	主任	細辻嘉門	嘱託　久保浩一郎

5　現地発掘調査及び資料整理に際し、下記の諸氏、諸機関のご指導、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略）
新木義春、岡本淳一郎、金三津英則、栗山雅夫、先達正明、谷口勉、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、上条新町町内会、宮町町内会、長沢地区

6　出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
7　本書の執筆・編集は細辻・久保が行った。文責は文末に記した。

凡　例

1　本書で用いた座標は世界測地系に準拠した。方位は真北、水平基準は海抜である。
2　土層説明および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1994年版』に拠る。
3　遺構の標記は土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、ピット：ＳＰ、井戸：ＳＥを用いた。
4　図版中の網掛は、以下のとおりである。
煤　須恵器・珠洲の断面　地山

目　次

Ⅰ　水橋専光寺遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1～12
第1章　経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第1節　調査の経過
第2節　発掘作業及び整理等作業の経過
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３章　調査の方法と成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4～5
第１節　基本層序
第２節　遺構
第３節　遺物
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第５章　理化学的分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6～9
第１節　資料
第２節　観察方法
第３節　結果

Ⅱ　宮町遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13～20
第1章　経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第1節　調査の経過
第2節　発掘作業及び整理等作業の経過
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第３章　調査の方法と成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16～17
第１節　基本層序
第２節　遺構
第３節　遺物
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

Ⅲ　鍛冶町遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21～27
第1章　経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第1節　調査の経過
第2節　発掘作業及び整理等作業の経過
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
第３章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24～25
第１節　基本層序
第２節　遺構及び遺物
第４章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27～28

挿図目次

第 1 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第 2 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第 3 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第 4 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第 5 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
第 6 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第 7 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第 8 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第 9 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第 10 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
第 11 図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

表目次

表1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
表2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
表3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
表4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
表5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
表6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

写真図版目次

図版1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
図版2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図版3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
図版4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図版5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図版6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図版7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図版8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図版 9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図版10・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図版11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図版12・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図版13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
図版14・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
図版15・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図版16・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

Ⅰ　水橋専光寺（みずはしせんこうじ）遺跡

第１章　経過

第1節　調査の経過

水橋専光寺遺跡は昭和 63 年度～平成 3 年度に富山市教育委員会が実施した分布調査で確認され富山市の遺跡地図に遺跡№201230 として登載された。埋蔵文化財包蔵地の面積は 18,300 ㎡である。

平成 18 年 5 月 22 日、富山市水橋上条新町地内において、個人住宅建設の際、地盤改良について問合せがあった。建設予定地全域 301.71 ㎡は平成 13～14 年度の発掘調査で埋蔵文化財が所在することが確実であったため、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、地盤改良工事が遺構面に達することから、住宅建築部分 164 ㎡について発掘調査を行うこととなった。

第２節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は平成 18 年 6 月 14 日から同年 7 月 5 日まで行なった。表土掘削は平成 18 年 6 月 14 日からバックホウを用いて行った。表土除去完了後の 19 日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業を行い、30 日には遺構掘削を終え、全景写真を撮影した。7 月 3 日にバックホウを用いて埋め戻し作業を行い、7 月 5 日調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は現地調査終了後平成 19 年 3 月 30 日まで行った。

第２章　遺跡の位置と環境（第１図、図版３、遺跡名後の数字は第１図の遺跡番号と対応する）

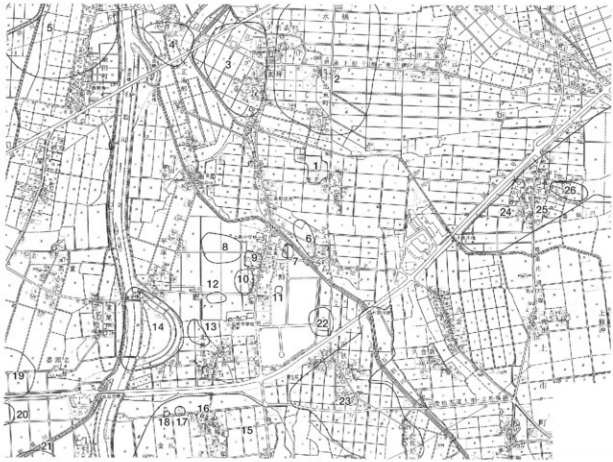
水橋専光寺遺跡（1）は富山市北東部、富山市水橋上条新町地内に所在する縄文時代から近世にわたる集落遺跡である。水橋上条新町地区は、常願寺川・白岩川・上市川下流部が形成する扇状地上に立地する。調査区付近の標高は 5m前後を測る。

本遺跡では、平成 13 年度～14 年度にかけて分譲住宅団地造成に先立ち本調査が実施されている。その結果、平行・直交・L 字形に走る区画溝・井戸・柱穴等が多数検出され、中・近世の「掘立柱建物を主体とする集落」遺跡とされている。〔富山市教育委員会 2005〕

本遺跡の周辺には、白岩川本支流の両岸及び上市川の河岸段丘間に形成された微高地上に縄文時代から近世に至る数多くの遺跡が存在する。近年大規模な発掘調査が行われている遺跡としては、本遺跡の北西 3 ㎞に水橋荒町・辻ヶ堂遺跡がある。水橋浄化センター建設に先立って平成 3 年度～5 年度に 12,300 ㎡、平成 8 年度～9 年度に 1,954 ㎡、常願寺川右岸本線払堤工事に先立って平成 12 年度に 840 ㎡、病院施設等建設に先立って平成 8 年度に 840 ㎡、平成 16 年度に 1,650 ㎡が発掘調査されている。その結果、水橋浄化センターの調査では掘立柱建物 50 棟・井戸 24 基・区画溝・道路跡など奈良・平安時代の遺構を多数検出し、このことから、延喜式に記載された越中八駅の一つ「水橋駅」に比定されている。〔富山市教育委員会 1997・2002・2005、富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査会 1999〕

南西 1.5 ㎞には水橋金広・中馬場遺跡（15）がある。県営農免農道（上条南部地区）整備事業に先立って平成 11 年度～12 年度に 2,120 ㎡、平成 14 年度～16 年度に 5,106.81 ㎡が発掘調査されている。その結果、調査区すぐ東隣にある若王子塚古墳の周溝や、溝で区画された中世の居館跡が検出され、双六盤や線刻でヤスを刻んだ臼が出土した。調査結果から、若王子塚古墳は直径 46m の円墳に復元され、中世には村落領主クラスの人物が居館を構えたのであろうと推測されている。〔富山市教育委員会 2001・2006〕

北西 500m には小出城跡（3）がある。天文 14（1545）年から天正 11（1583）年まで文献史料に登場し、小出神社の西南にあったと伝えられていたが、長らく正確な位置は不明であった。平成 9 年度に個人住宅建築に先立って 150 ㎡の発掘調査、平成 13 年度に資材置場造成に先立ち 26 ㎡の試掘調査、平成 15 年度～17 年度にかけて一般県道下砂子坂池出町線道路改良工事に先立ち 713 ㎡で発掘調査が



1.水橋専光寺遺跡　2.水橋小出遺跡　3.小出城跡　4.水橋大正前跡　5.水橋池田館遺跡　6.水橋高寺遺跡　7.水橋右割V遺跡
8.水橋右割IV遺跡　9.水橋右割II遺跡　10.水橋右割I遺跡　11.水橋右割遺跡　12.水橋平塚遺跡　13.水橋北馬場遺跡　14.金尾遺跡
15.水橋金広・中馬場遺跡　16.水橋中馬場塚　17.若王子塚古墳　18.宮塚古墳　19.金尾新遺跡　20.金尾新東遺跡　21.新堀東遺跡
22.水橋田伏遺跡　23.田伏・佐野竹遺跡　24.水橋上砂子坂遺跡　25.水橋下砂子坂遺跡　26.水橋下砂子坂遺跡

第１図　周辺の遺跡位置図 (1/20000) 及び調査対象地位置図 (1/5000) 上が北

行われ、最大幅10mの堀跡を確認し、不詳だった城の位置がほぼ特定された。その城域は150m以上になる可能性があり、中世陶磁器や漆器・木製品など当時の生活が窺える遺物が大量に出土した。〔富山県教育委員会 2004・2005・2006〕

第3章　調査の方法と成果

第1節　基本層序(第2図)

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、宅地造成によって地表面より50～70cm下まで盛土が行われており、それより下層については、部分的に見られる堆積や撹乱、小規模な遺構埋土を除き、大まかに以下のように3層に分けることができる。今回の調査では、Ⅲ層の上面で遺構検出を行なった。

Ⅰ層：オリーブ黒色砂質シルト（ビニール等混、旧表土）層厚10～25 cm

Ⅱ層：黒褐色シルト（遺物包含層・遺構埋土）層厚0～15 cm

Ⅲ層：オリーブ褐色シルト（地山）

第2節　遺構(第2・3図、図版4・5)

調査区全体で、中世の井戸2基、近世以降の溝7本、土坑1基、ピット8基を検出した。遺構の概要は以下のとおりである。（細辻）

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
SD01	弧線	8.05(検出長)	2.4(検出長)	0.8	舟底形	縄文土器・弥生土器・須恵器・珠洲・土製品・木製品・漆器・石製品	平成13～14年度調査の近世河川跡に繋がる
SD02	弧線	6.8(検出長)	0.8	0.15	舟底形	縄文土器・越中瀬戸・石製品	
SD03	直線	2.2(検出長)	0.35	0.05	舟底形	—	
SD04	直線	1.7(検出長)	0.3	0.05	舟底形	越中瀬戸	
SD10	不整形	8.9(検出長)	2.7	0.15	舟底形	—	
SD11	直線	3.85(検出長)	0.6	0.2	舟底形	中世土師器・石製品	
SD18	直線	2.5(検出長)	0.6	0.2	舟底形	須恵器	
SD23	直線	2.75(検出長)	0.55	0.2	U字形	—	
SD26	直線	1.8(検出長)	0.45	0.1	舟底形	木製品	
SE25	円形	0.7	0.7	0.55	U字形	中世土師器・礫	礫は被熱を受けている
SE27	円形	0.8	0.8	0.7	U字形	中世土師器・礫	礫は被熱を受けている
SK28	不整形	0.9	0.6	0.3	不整形	土師器	
SP06	円形	0.25	0.25	0.2	U字形	—	
SP07	円形	0.25	0.25	0.2	U字形	—	
SP12	円形	0.3	0.3	0.1	U字形	—	
SP13	円形	0.3	0.3	0.1	U字形	—	
SP15	不整形	0.55	0.35	0.15	不整形	—	
SP19	円形	0.35	0.35	0.15	U字形	—	
SP20	楕円形	0.45	0.3	0.4	U字形	—	
SP22	楕円形	0.4	0.3	0.15	U字形	—	

表1　遺構一覧表

第3節　遺物(第4図、図版6)

今回の調査では、縄文土器、弥生土器、須恵器、珠洲、中世土師器、近世陶磁器、木製品、漆器、石製品などがコンテナボックスに換算して9箱出土した。各遺物の詳細については次のとおりである。

SD01　1～3は縄文土器である。4～6は弥生土器である。7は須恵器の蓋である。8は非ロクロ成形の中世土師皿である。9は珠洲甕の体部を加工した陶片加工円盤である。10は珠洲の片口鉢である。11は杭状木製品で、先端が鋭く加工されている。12は緑色凝灰岩の剥片である。管玉製作工程の形

割段階のものと考えられる。13は砥石の破片である。14は茶臼である。下臼の端部破片である。

SD02　15は縄文土器である。16は越中瀬戸の皿である。内外面とも灰釉が施されている。17は石臼である。上臼の端部破片である。

SD04　18は越中瀬戸の擂鉢である。外面は摩滅によりやや丸みを帯びている。

SD11　21は中世土師皿である。非ロクロ成形でやや丸い底部から開き気味に立ちあがり、端部は丸くおさめている。22は軽石製品である。

SD18　19は須恵器の杯蓋である。20は瀬戸美濃の天目茶碗である。

SD26　24は板状の木製品である。樹種はマツ科マツ属である。

SD28　23は土師器である。甕の底部と考えられる。

包含層　包含層からは須恵器・瀬戸美濃・越中瀬戸・土人形の破片・砥石などが出土した。(久保)

番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土 質	胎土 砂粒	焼成	色調 内面	色調 外面	成形・調整 内面	成形・調整 外面	備考
1	SD01	縄文土器	—	—	—	密	1mm	良	2.5Y7/3浅黄色	2.5Y8/3浅黄色	不明	縄文	
2	SD01	縄文土器	—	—	—	密	1~2mm	良	2.5Y8/2灰黄色	2.5Y8/2灰黄色	不明	縄文	
3	SD01	縄文土器	—	—	—	密	1~5mm	良	10YR8/3浅黄橙色	10YR6/3浅黄橙色にぶい黄橙色	不明	縄文	
4	SD01	弥生土器・壺	13.6	—	—	密	1mm	良	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい黄橙色	不明	不明	
5	SD01	弥生土器	—	—	7.8	密	1~3mm	良	10YR5/1褐灰色	2.5Y8/2灰白色	不明	磨き	
6	SD01	弥生土器・高杯	—	—	—	密	1mm少量	黒	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	不明	不明	
7	SD01	須恵器・甕	—	—	—	密	—	良	10Y8/1灰色	10Y6/1灰色	ロクロナデ	ケズリ+ロクロナデ	
8	SD01	中世土師器・皿	16.1	—	—	密	—	悪	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ	
10	SD01	珠洲・片口鉢	36.0	—	—	密	—	良	N5/灰色	N5/灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	
15	SD02	縄文土器	—	—	—	密	1~3mm	良	10Y3/1オリーブ黒色	10YR6/2灰白色	不明	縄文	
16	SD02	越中瀬戸・皿	11.8	—	—	密	—	良	5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面灰釉施釉
18	SD04	越中瀬戸・擂鉢	—	—	7.2	密	2~3mm	良	7.5YR2/3極暗褐色	7.5YR2/3極暗褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面施釉
19	SD18	須恵器・甕	15.1	—	—	密		悪	10YR8/3浅黄橙色	2.5Y8/2灰黄色	ロクロナデ	ケズリ+ロクロナデ	
20	SD18	瀬戸美濃・碗	15.8	—	—	密		良	5Y7/4淡黄色	5Y7/4淡黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	
21	SD11	中世土師器・皿	7.7	—	—	密		良	7.5YR8/4淡黄橙色	7.5YR8/4淡黄橙色	ナデ	ナデ・ユビオサエ	
23	9K26	土師器	—	—	8.0	密		悪	5Y8/1灰白色	5Y8/1灰白色			
25	包含層	須恵器・蓋	—	—	—	密		良	N7/灰白色	2.5Y5/1黄灰色	ロクロナデ	ケズリ+ロクロナデ	
26	包含層	須恵器・蓋	11.9	—	—	密	1mm少量	良	10Y5/1灰色	N4/灰色	ロクロナデ	ケズリ+ロクロナデ	
27	包含層	越中瀬戸	—	—	—	密		良	2.5Y8/3浅黄色	2.5Y8/3浅黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	
28	包含層	越中瀬戸・皿	9.0	—	—	密		良	10YR3/4暗褐色	2.5Y8/3浅黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	
29	包含層	越中瀬戸・皿	10.0	—	—	密		良	2.5Y7/3浅黄色	7.5YR5/3にぶい褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	
30	包含層	越中瀬戸・碗	—	—	7.4	密		良	5Y5/4オリーブ色	5Y5/4オリーブ色	ロクロナデ	ロクロナデ	
31	包含層	瀬戸美濃・碗	10.2	—	—	密		良	7.5YR2/3極暗褐色	7.5YR2/3極暗褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	成形・調整	備考
9	SD01	土製品	14.1	2.4	2.8	—	N5/灰色	縁取り	珠洲の破片
32	包含層	土製品	—	—	—	—	10YR8/2灰白色		
33	包含層	土製品	—	—	—	—	10YR8/2灰白色		
11	SD01	木製品	14.1	2.8	2.5	—		舷利な鉄器による削加工	樹種：ヒノキ科アスナロ属
24	SD26	木製品	25.3	8.8	1.5	—			
12	SD01	石製品	1.1	0.5	0.5	0.35	SG4/1　緑灰色		緑色凝灰岩、管玉未製品
13	SD01	石製品	5.0	3.1	2.9	39.32	7.5Y6/1灰色		砥石破片
14	SD01	石製品	—	—	—	—			茶臼
17	SD02	石製品	—	—	—	—			石臼
22	SD11	石製品	3.3	3.3	2.6	5.6	10YR5/1褐灰色		軽石製品
34	包含層	石製品	4.6	8.7	6.0	19.1	10Y7/1灰白色		砥石か

表2　遺物観察表

第4章　総括

今回の調査では、調査区の北寄りで遺構を集中して検出した。集落の端部であると考えられる。

調査区北東端では平成13～14年度に発掘調査を実施した際に検出された河川跡の続きを確認した。

堆積をよく観察すると、水平に何層も積み重なっている。出土遺物は縄文土器、弥生土器、須恵器、珠洲、土製品、木製品、漆器、石製品と様々な時代のものがあり、完形品はなく、磨滅が激しい。近

年の耕地整理で整地するまで、河川として機能していたのではないかと判断される。

調査区の西では中世の井戸を２基検出した。どちらも同じ規模、堆積であり、湧水地点を狙って井戸を作った、と考えられる。遺物は中世土師器があるが、小破片で、しかも磨滅が激しいため、時期は中世としか判断できなかった。その他、どちらの井戸も、被熱を受けたと思われる礫が十数個入っていた。深さはまちまちで規則性はなく、何の用途か不明である。（織辻）

第５章　理化学的分析

富山市水橋専光寺遺跡出土木製品の樹種調査結果

株式会社吉田生物研究所

第１節　試料

試料は富山市水橋専光寺遺跡から出土した食事具１点、容器１点、土木具２点、用途不明品２点の合計６点である。

第２節　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

第３節　結果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹２種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

(1)マツ科マツ属[二葉松類]（*Pinus* sp.）（遺物 No.1）・（写真 No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

(2)ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）（遺物 No.2～4）・（写真 No.2～4）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

(3)カバノキ科ハシバミ属（*Corylus* sp.）（遺物 No.5）・（写真 No.5）

散孔材である。木口では年輪界は放射組織部分で外方に向かって凹状となり、顕著な波状を呈する。道管（～50μm 前後）はやや小さく、単独ないし２～10 個が複合して、放射方向に配列する。軸方向柔細胞は１列の短接線状および散在状となる。柾目では道管は階段穿孔を有し、階段の数は５～15 本。内壁にらせん肥厚がみられ、側壁に交互壁孔がみられる。放射組織は異性、ときに同性である。板目では放射組織は単列ときに２～３列となり幅の広い顕著な集合放射組織を有する。ピスフレックがみられる。ハシバミ属はハシバミ、ツノハシバミがあり、北海道、本州、九州に分布する。

(4)ブナ科ブナ属（*Fagus* sp.）（遺物 No.6）・（写真 No.6）

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110μm）がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、２～３列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物（チロース）

が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、２～３列、広放射組織の３種類がある。広放射組織は肉眼でも１～３㎜の高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

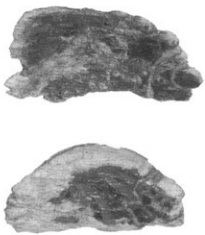
＜参考文献＞
島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所 (1999)
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社 (1979)
深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

＜使用顕微鏡＞
Nikon
MICROFLEX UFX-DX Type 115

富山市水橋専光寺遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	板状木製品	マツ科マツ属〔二葉松類〕
2	杭	ヒノキ科アスナロ属
3	杭	ヒノキ科アスナロ属
4	箸	ヒノキ科アスナロ属
5	不明木製品	カバノキ科ハシバミ属
6	漆器	ブナ科ブナ属

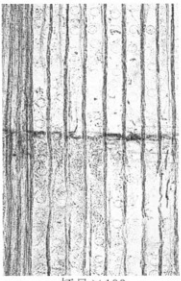
漆器保存処理前

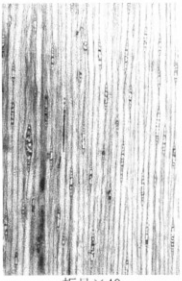


漆器保存処理後

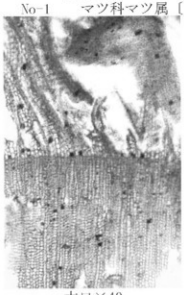
図版1　理科学的分析

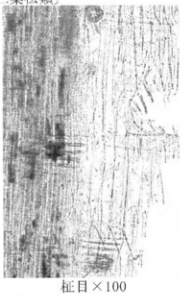
木口×40


柾目×100


板目×40

No-1　　マツ科マツ属〔二葉松類〕


木口×40


柾目×100

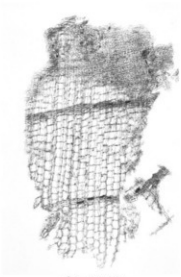
板目×40

No-2　　ヒノキ科アスナロ属

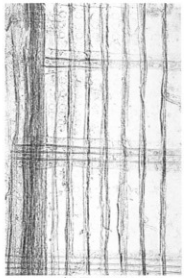
柾目×100

板目×40

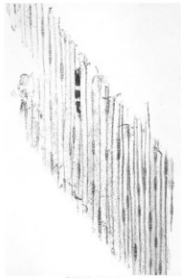
No-3　　ヒノキ科アスナロ属



木口×40

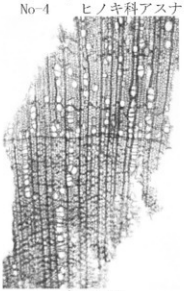


柾目×100



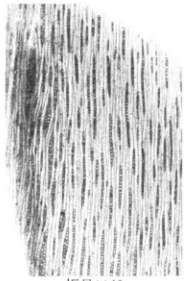
板目×40

No-4　ヒノキ科アスナロ属



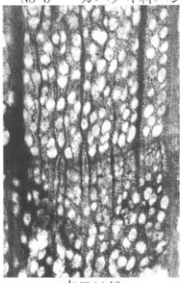
木口×40

柾目×40

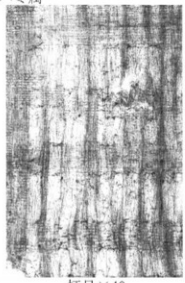


板目×40

No-5　カバノキ科ハシバミ属



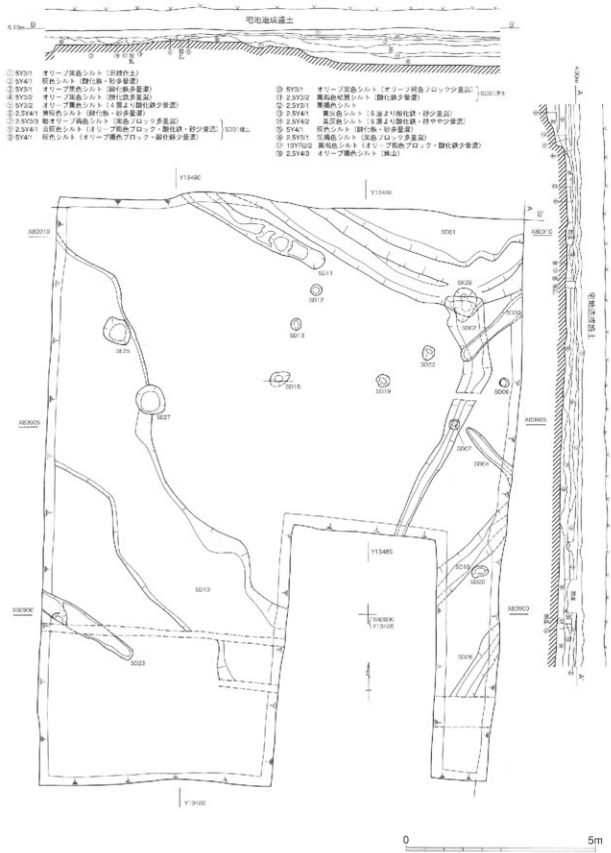
木口×40

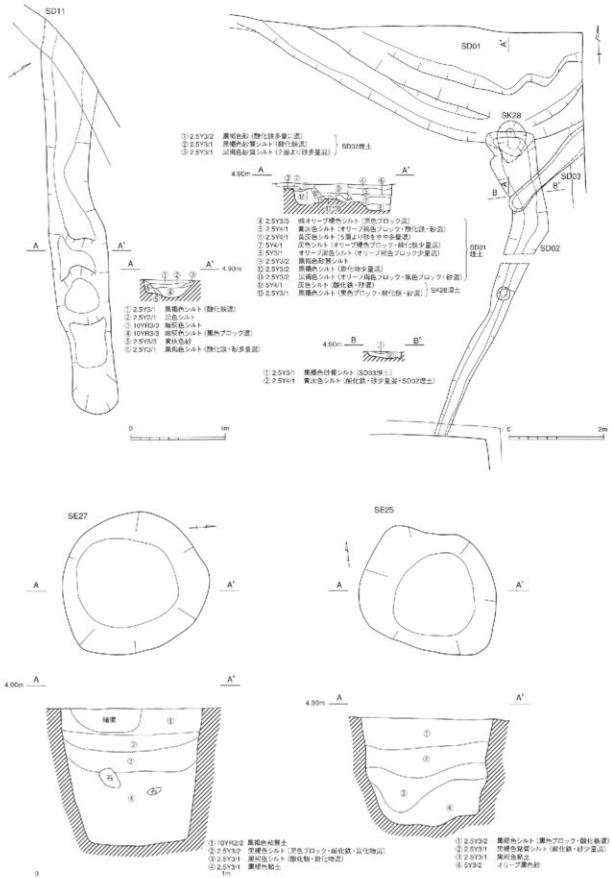


柾目×40

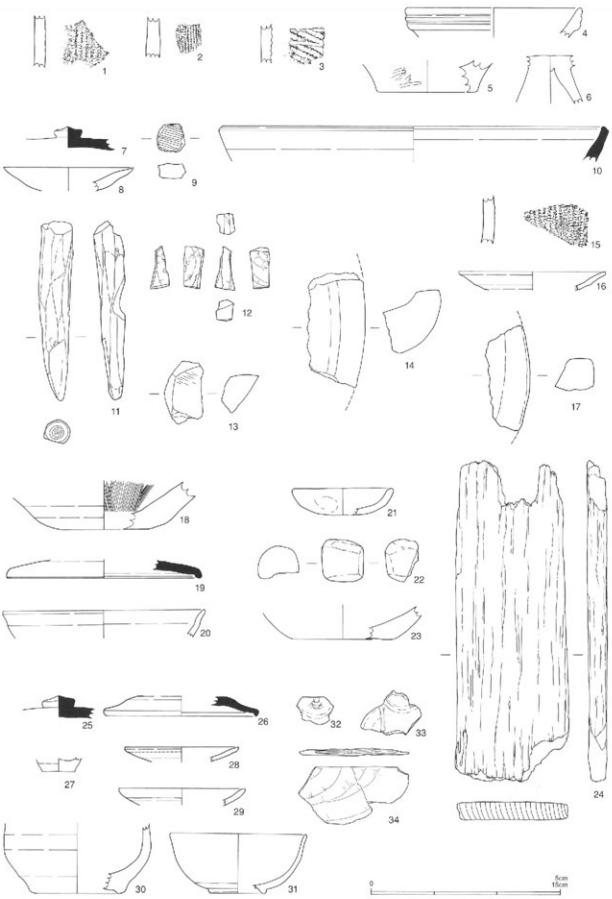
板目×40

No-6　ブナ科ブナ属


宅地造成盛土
① 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（炭化物中土）
② 5Y4/1 灰色シルト（酸化鉄・粒少量混）
③ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（酸化鉄多量混）
④ 5Y3/2 オリーブ黒色シルト（酸化鉄多量混）
⑤ 5Y3/2 オリーブ黒色シルト（4層より酸化鉄少量混）
⑥ 2.5Y4/1 黄灰色シルト（酸化鉄・粒少量混）
⑦ 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト（黒色ブロック多量混）
⑧ 2.5Y4/1 灰色シルト（オリーブ褐色ブロック・酸化鉄・砂少量混）
⑨ 5Y4/1 灰色シルト（オリーブ褐色ブロック・酸化鉄少量混）
⑩ 5Y3/1 オリーブ黒色シルト（オリーブ褐色ブロック少量混）
⑪ 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト（酸化鉄少量混）
⑫ 2.5Y3/1 黒褐色シルト
⑬ 2.5Y4/1 黄灰色シルト（5層より酸化鉄・砂少量混）
⑭ 2.5Y4/2 灰黄色シルト（5層より酸化鉄・砂やや少量混）
⑮ 5Y4/1 灰色シルト（酸化鉄・砂多量混）
⑯ 2.5Y5/1 黄褐色シルト（黒色ブロック多量混）
⑰ 10YR5/2 黄褐色シルト（オリーブ褐色ブロック・酸化鉄少量混）
⑱ 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（地山）
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40



第3図　遺構平面図及び遺構断面図（SD11は1／40、SE25、SE27は1／20、その他は1／80）



第4図　出土遺物実測図（12は実物大、その他は1/3）

Ⅱ　宮町（みやまち）遺跡

第1章　経過

第1節　調査の経過

宮町遺跡は昭和63年度～平成3年度の分布調査で確認され、富山市の遺跡地図に遺跡№201210として登載された。埋蔵文化財包蔵地の面積は126,700㎡である。

平成18年4月3日、富山市宮町地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地全域700㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年4月18日に試掘確認調査を実施し、工事区域のうち460㎡において、埋蔵文化財の所在が確認された。調査では古代の土坑、溝が検出され、須恵器、土師器が出土した。試掘確認調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、掘削工事が遺構面に達することから、住宅建築部分と擁壁工事の一部103.5㎡について発掘調査を行うこととなった。

第2節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は平成18年10月30日から11月30日まで行なった。表土掘削は平成18年10月30日からバックホウを用いて行った。表土除去完了後の11月1日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を行ない、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業を行い、21日には遺構掘削を終え、全景写真撮影とラジコンヘリにより空中写真を撮影した。27日からバックホウを用いて埋め戻し作業を行い、30日調査を完了した。

遺物整理作業・報告書作成作業は現地調査終了後から平成19年3月30日まで行った。

第2章　遺跡の位置と環境（第5図、図版7、遺跡名後の数字は第5図の遺跡番号と対応する）

宮町遺跡（1）は富山市北部富山市宮町地内に所在する、縄文時代から近世にわたる集落・城館遺跡である。宮町地区は常願寺川左岸の微高地上に位置する。調査区付近の標高は8m前後を測る。

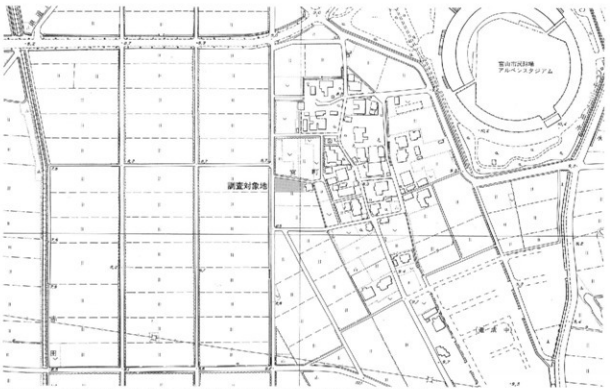
本遺跡では、平成6年度から9年度にかけて今回調査対象地の南東12,860㎡で住宅団地造成に先立つ発掘調査が行なわれている。この調査では、弥生後期から古墳前期の井戸跡・土坑、奈良・平安の掘立柱建物・道路状遺構、戦国時代の城館跡、道路状遺構が検出され、管玉・未製品・砥石・鉄鏃、墨書土器「東口」「南」「大」など弥生時代から中世に至る遺物が数多く出土している。〔富山市教育委員会1995、富山県教育委員会1995・1996・1997・1998、古川1995、〕

本遺跡周辺の遺跡としては、北東1.2kmに針原中町1遺跡がある。平成9年度に低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業に先立って1,800㎡で発掘調査が行われ、竪穴状遺構・土坑・掘立柱建物・溝が検出されている。竪穴状遺構から弥生時代中期の土器が出土した。〔富山市教育委員会2001〕

西方450mには飯野新屋遺跡がある。昭和58年度に主要地方道富山環状線敷設に先立ち770㎡で発掘調査が行われ、楕円形の井戸から古墳時代前期の遺物が多く出土した。これは井戸を廃棄する際に破砕した赤彩の土器を投げ入れて祭祀を行ったと考えられている。〔富山市教育委員会1984〕

南方600mには小西北遺跡がある。平成6年度には特別養護老人ホーム建設に先立ち2,890㎡、平成10年度には老人福祉施設建設に先立って1,411㎡が発掘調査され、宮町～安土桃山時代の掘跡・掘立柱建物・井戸などの遺構が顕著に検出されている。各遺構からは中国製輸入陶磁器・珠洲、漆塗椀・皿・このわた桶などの曲物・多量の箸・漆塗櫛など多量の木製品・小柄が出土し、中でも漆塗皿に「三つ盛り丸に二頭右巴」紋が描かれたものがあり、「二頭右巴」を家紋とする神保氏に関係が深い館跡であると考えられている。〔富山市教育委員会2001、古川2000〕

1.宮町遺跡　2.飯野新屋遺跡　3.小西北遺跡　4.針原中町Ⅱ遺跡　5.針原中町Ⅰ遺跡　6.高島遺跡　7.高島島浦遺跡
8.野中七百苅遺跡　9.宮成遺跡　10.三上遺跡　11.三上Ⅱ遺跡　12.金泉寺遺跡　13.HS−06遺跡　14.新屋殿町遺跡
15.飯野小百苅遺跡　16.米田大覚遺跡　17.水落遺跡　18.水落南遺跡　19.水落西遺跡　20.豊田中吉原Ⅱ遺跡



第 5 図　周辺の遺跡位置図 (1/20000) 及び調査対象地位置図 (1/5000) 上が北

第３章　調査の方法と成果

現地工事は母屋部分・納屋部分・擁壁部分の３ヵ所に分かれるため、母屋部分をＡ区、納屋部分をＢ区、擁壁部分をＣ区として、発掘調査を実施した。

第１節　基本層序（第６図）

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、部分的に見られる堆積や撹乱、小規模な遺構埋土を除き、大まかに以下のように３層に分けることができる。今回の調査では、Ⅳ層の上面で遺構の検出を行った。

Ⅰ層：黄灰色土（耕作土）層厚 20～30 ㎝

Ⅱ層：黄灰色粘質土（耕盤土）層厚 5～15 ㎝

Ⅲ層：褐灰色シルト（遺物包含層・中近世遺構埋土）層厚 0～20 ㎝

Ⅳ層：浅黄色砂質シルト（地山）

第2節　遺構（第６･７図、図版８･９･10）

調査区全体で、弥生時代中期後半の井戸１基、弥生時代後期初頭の溝１本、近世の溝２本、時期不明の溝・土坑・ピットを 25 基検出した。遺構の概要は次のとおりである。

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
SE19	円形	2.3	2.3	0.8	台形	弥生土器（中期後半）・礫	西側部分耕地整理により損壊
SD17	弧線	3.3（検出長）	0.7	0.25	台形	弥生土器（天王山系）	
SP20	円形	0.3	0.3	0.35	U字形	弥生土器	
SD15	直線	3.1（検出長）	1.8	1.1	台形	須恵器・珠洲・近世陶器・木製品	
SD10	直線	7.6（検出長）	1.4	0.7	台形	須恵器・中世土師器・近世陶磁器	
SK08	方形	5.4（検出長）	1.2（検出長）	0.3	不整形	須恵器・珠洲・中世土師器	
SK09	楕円？	0.9	0.2（検出長）	0.1	舟底形	—	
SD16	直線	1.6	0.3	0.2	U字形	—	
SD18	曲線	1.4	0.55	0.05	舟底形	—	
SP01	半円	0.5	0.2（検出長）	0.15	U字形	—	
SP02	円形	0.25	0.25	0.1	U字形	—	
SP03	楕円形	0.4	0.35	0.25	U字形	—	
SP06	円形	0.5	0.5	0.2	U字形	—	
SP07	不整形	0.4	0.4	0.1	U字形	—	
SP11	半円	0.4	0.2（検出長）	0.2	U字形	—	
SP13	不整形	0.35	0.25	0.2	不整形	—	
SP21	円形	0.35	0.35	0.3	U字形	—	
SP22	円形	0.4	0.4	0.2	不整形	—	
SP23	円形	0.3	0.3	0.3	U字形	—	
SP24	楕円形	0.45	0.35	0.3	不整形	—	
SP26	楕円形	0.5	0.35	0.3	不整形	—	
SP28	円形	0.35	0.35	0.1	U字形	—	
SP29	円形	0.3	0.3	0.1	U字形	—	
SP30	円形	0.2	0.2	0.1	U字形	—	
SP31	円形	0.4	0.35	0.1	U字形	—	
SP32	円形	0.3	0.3	0.1	U字形	—	
SP33	円形	0.6	0.5	0.15	不整形	—	

表３ 遺構一覧表

第3節　遺物（第８図、図版 11･12）

弥生土器、須恵器、珠洲、中世土師器、近世陶磁器、木製品などがコンテナに換算し８箱出土した。

SE19　1～3 は弥生土器である。1 は遺構の底部からまとまって出土した。復元すると底部のみ欠損している。頸部がやや締まり、倒卵形の器形を呈し、口唇部にはキザミを施す。胴部８割ほどの高さまで煤が付着する。2 はくの字状の口縁部である。口縁端部にキザミを施す。外面全体に煤が付着。3 は壺の底部である。外面はハケ後ミガキ、内面はケズリとハケを施す。以上の特徴から、時期は弥生時代中期後半と判断した。**4・5** は礫である。4 は安山岩である。5 は蛇紋岩で、側面に使用痕がある。

図示した以外のものも合わせると5点あるが、全て滑らかでつるつるしている。

SD17　14・15は弥生土器である。14は大きさ、器種、調整とも不明。15は弥生土器甕である。小さな破片であるが、縄文地に2条の沈線を施し、交互に刺突文を施す。後期初頭の天王山系である。

SP20　13は弥生土器壺の頸部である。内外面にハケを施す。

SK08　6は須恵器の坏である。7は中世土師器の皿である。どちらも摩滅が激しい。

SD10　8は須恵器の坏である。9は中世土師器の皿である。

SD15　10・11は須恵器の杯蓋である。12は珠洲の甕である。

包含層　包含層からは珠洲・瀬戸美濃・伊万里・不明土製品などが出土した。

番号	出土地点	器種	形態 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	焼土 質	焼成	色調 内面	色調 外面	成形・調整 内面	成形・調整 外面	備考
1	SK19	弥生土器・甕	22.9	(42.0)	—	密	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	ハケ＋ナデ	ハケ・口唇部キザミ	外面煤
2	SK19	弥生土器・甕	21.2	—	—	密	良	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	ナデ	ハケ・口唇部キザミ	外面煤
3	SK19	弥生土器・壺	—	(24.7)	7.7	密	1mm少量	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	ケズリ＋ハケ	ハケ＋ヨガキ	
4	SK08	須恵器・坏	—	—	8.7	密	5mm	7.5Y7/1灰白色	7.5Y7/1灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
7	SK08	中世土師器・皿	10.9	—	—	密		2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	ナデ	ナデ　ユビオサエ	
8	SD10	須恵器・坏	—	—	8.0	密		2.5Y7/3浅黄色	10YR6/4 にぶい黄橙色	ロクロナデ	ロクロナデ	
9	SD10	中世土師器・皿	8.0	—	—	密		2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	ナデ	ナデ	
10	SD15	須恵器・蓋	—	—	—	密		N5/ 灰色	N5/ 灰色	ロクロナデ	ロクロナデ	
11	SD15	須恵器・杯	—	—	8.3	密		7.5Y8/1灰白色	N7/ 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
12	SD15	珠洲・壺	—	—	—	密	1～3mm	N5/ 灰色	N3/ 暗灰色	ラタキ	ラタキ	
13	SP20	弥生土器	—	—	—	密		7.5YR6/4 浅黄橙色	7.5YR5/4 浅黄橙色	ハケ	ハケ	
14	SD17	弥生土器	—	—	—	疎	3～5cm 多量	10YR6/3 にぶい黄橙色	10YR8/2灰白色	ナデ	不明	
15	SD17	弥生土器	—	—	—	密		10YR5/1 褐灰色	10YR8/2灰白色	ナデ	頸文・沈線・交互刺突文	天王山系
16	包含層	珠洲・壺	39.0	—	—	密		7.5Y6/1灰色	N7/ 灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
17	包含層	瀬戸美濃・皿	—	—	7.2	密		5Y8/2灰白色	2.5Y8/1浅黄色	ロクロナデ	ロクロナデ	内面施釉
18	包含層	伊万里・碗	—	—	4.5	密		10Y7/2灰白色	10Y7/2灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	内外面施釉

番号	出土地点	器種	形態 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	成形・調整	備考
17	包含層	土製品	3.3	2.9	1.5		2.5Y8/3浅黄色	型押し？	
4	SK19	石製品	6.3	9.4	7.1	605.90	10Y6/1灰白色		石材：安山岩
5	SK19	石製品	6.5	7.1	2.9	191.59	10Y3/2オリーブ黒色		石材：軟質凝

表4　遺物観察表

第4章　総括

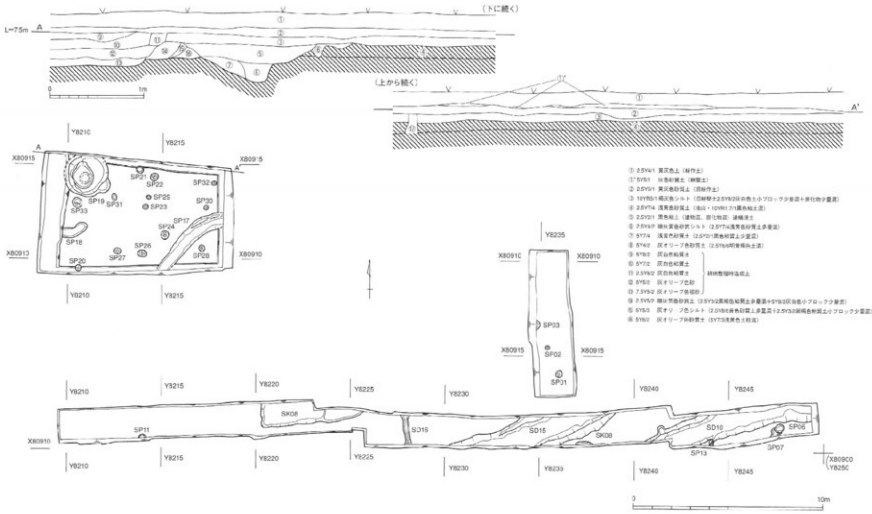
今回の調査では、調査区の北西寄りでは弥生時代中期後半の井戸、後期初頭の溝、調査区の南東寄りでは中世から近代に至る溝を確認した。

ＳＥ19は、断面観察では、埋土は単層で、一度に埋まったようである。井戸枠の痕跡は見られず素掘りと考えられる。出土遺物は遺構底部に集中し、礫も上器に伴う。炭化物は埋土上部から出土した。井戸廃棄時に祭祀を行ったと考えられる。ただし赤彩のものはない。上器は3点しかないが、その特徴から弥生中期後半であると判断した。炭化物は放射性炭素測定（AMS 法）と樹種同定を行い、年代は1σ暦年代範囲で40ｃalBC−10ｃalBC(20.4%)、5ｃalBC−30ｃalAD(38.8%)、40ｃalAD−50ｃalAD(9.0%)、2σ暦年代範囲で45ｃalBC−60ｃalAD（95.4%)、樹種はケヤキという結果が出ている。

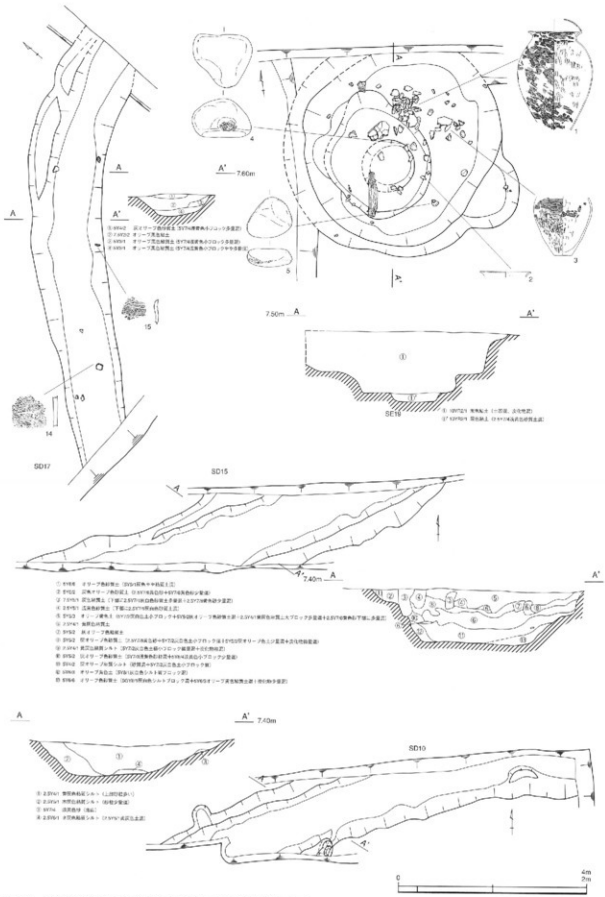
ＳＤ17は調査区の南西から北東に向かって流れる。遺物は埋土上部から出土している。小破片1点しかないが、天王山系の特徴をもち、弥生時代後期初頭であると判断した。

針原中町Ⅰ遺跡の遺物は、実測図を見ると当遺跡よりやや古い様相である。また、飯野新屋遺跡では古墳時代前期の井戸祭祀遺構が見つかっている。一帯で場所を変えながら、弥生中期から連綿と集落を営んでいたと考えられる。

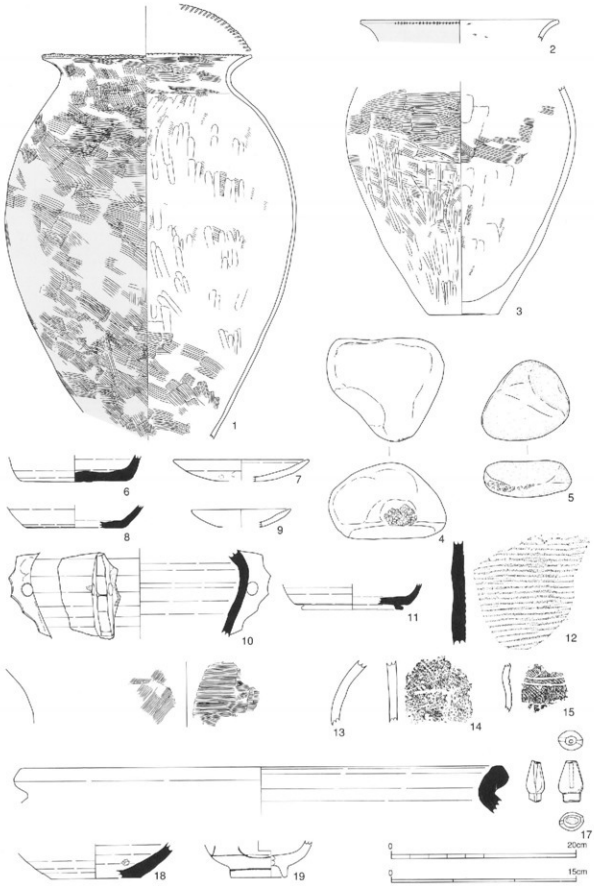
ＳＤ10 とＳＤ15 は、狭小な面積での検出だったため詳細の判断は難しいが、どちらも断面は舟底状を呈し、南西から北東に向かって流れる。断面を観察すると、ＳＤ10 がＳＤ15 を切り込んでいる。このため、ＳＤ15 の傍にＳＤ10 を新たに掘り直したと思われる。（細辻）



第６図　調査区全体図（1/200）及びA区北壁土層図（1/40）



第７図　遺構平面図・遺物出土状況図及び遺構断面図（SE19・SD15・SD10平面図は1/80、他は1/40、遺物は1,2,3が1/16他は1/4）



第8図　出土遺物実測図（1,2,3は1／4、その他は1／3）

Ⅲ　鍛冶町（かんじゃまち）遺跡

第1章　経過

第1節　調査の経過

鍛冶町遺跡は平成11年度の分布調査で確認され、合併前の旧婦中町遺跡地図に遺跡№362150として登載された。埋蔵文化財包蔵地の面積は70,300㎡である。

平成18年3月31日、富山市婦中町長沢地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地全域999㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年9月5日に試掘確認調査を実施し、工事区域のうち360㎡において、埋蔵文化財の所在が確認された。調査では古代の土坑、溝が検出され、弥生土器、須恵器、土師器が出土した。試掘確認調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、地盤改良工事が遺構面に達することから、住宅建築部分の一部23.7㎡について発掘調査を行うこととなった。

第2節　発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は平成18年12月11日から同月15日まで行なった。表土掘削は平成18年12月11日からバックホウを用いて行った。表土除去完了後の12日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業を行い、同月14日には遺構掘削を終え、全景写真を撮影した。同月15日にバックホウを用いて埋め戻し作業を行い、調査を完了した。遺物整理作業・報告書作成作業は現地調査終了後から平成19年3月30日まで行った。

第2章　遺跡の位置と環境（第9図、図版13、遺跡名後の数字は第9図の遺跡番号と対応する）

鍛冶町遺跡（1）は富山市南西部、富山市婦中町長沢地内に所在する弥生時代から近世にわたる集落遺跡である。婦中町長沢地区は山田川左岸の河岸段丘上に立地し、集落北西側には呉羽丘陵から続く丘陵が迫り、南には西から東へ山田川が流れる。調査区付近の標高は30m前後を測る。

今回の調査対象地東側では、平成12～13年度にかけて、当遺跡をほぼ南北方向に貫く形で敷設される一般国道472号道路建設に先立ち発掘調査を行った。その結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期の竪穴住居跡3棟・溝・土坑・土器廃棄遺構、奈良・平安時代の竪穴住居跡・溝・土坑、中世の溝・土坑などが検出され、弥生土器、古墳土師器、須恵器、土師器、中世土師器、近世陶器、砥石、鉄滓など様々な時期の遺物が大量に出土した。小字名に「鍛冶町（かんじゃまち）」があり、発掘調査で奈良・平安時代の遺構から、土師器、須恵器に伴って、鉄滓、砥石、焼土など、鍛冶関連の遺物が出土していることから、小字と調査結果との関連性がうかがえる。〔婦中町教育委員会 2003〕

本遺跡を含め、山田川を挟んだ丘陵上下には旧石器から中世に至るまで、数多くの遺跡が分布する。

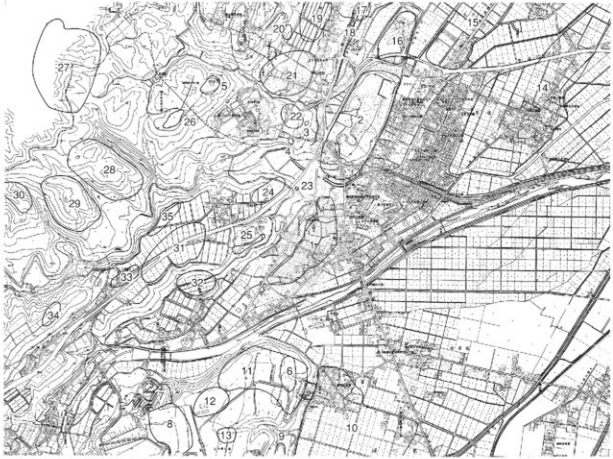
縄文時代の遺跡では、当遺跡の西方700mの丘陵上に鏡坂Ⅰ遺跡（31）がある。平成9年度から10年度にかけて、一般国道359号道路改築改良工事に先立ち6,928㎡で発掘調査が行なわれ、住居跡や土器廃棄遺構が確認され、新保・新崎期の土器や切目石錘が大量に出土した。〔婦中町教育委員会 2000〕

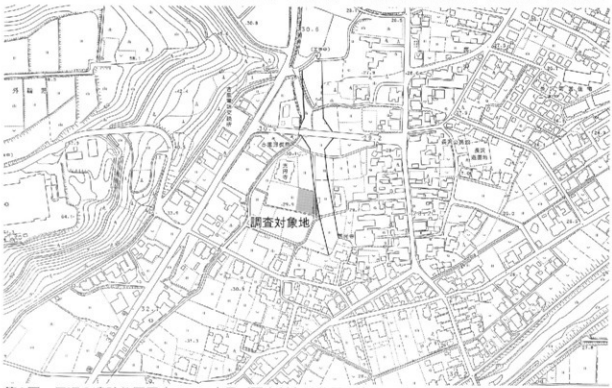
弥生時代後期後半に入ると一帯では急激に遺跡が増加する。

北方300mの独立丘陵上には千坊山遺跡（2）がある。平成6年度から平成9年度にかけて試掘調査を実施し、竪穴住居跡24棟が検出され、弥生時代後期後半から終末期にかけての遺物が出土した。このことから、当該期における県内最大級の集落遺跡であるとされた。〔婦中町教育委員会 2002〕

北方500mにある六治古塚墳墓（4）は、平成11年度に行った試掘結果から、一辺24.5m、高さ5.1mの四隅突出型墳丘墓であることが確認された。北方600mにある向野塚墳墓（3）は全長25.2mで周溝を持つ前方後方型墳丘墓である。〔婦中町教育委員会 2002〕

山田川を挟んで南西1.2kmには高崎赤坂遺跡（8）や薙山砦遺跡（7）がある。標高120mの富崎丘陵頂部に位置し、平成10年度と12年度に調査を実施した。その結果、弥生時代後期後半の土器廃棄





第9図　周辺の遺跡位置図（1/20000）及び調査対象地位置図（1/5000）上が北

遺構や竪穴住居跡等が確認された。立地からみて高地性集落と考えられる。南方 700mにある富崎墳墓群（6）は、平成 12 年度に試掘確認を行い、1 号墳は一辺 21.7m、高さ 3m、2 号墓は一辺 17m以上、高さ 2.8m、3 号墓は東西 21m、南北 22m、高さ 3.9mを測り、四隅突出型墳丘墓 3 基で構成されることがわかっている。遺物は 3 号墓から弥生時代後期後半の土器が大量に出土した。〔婦中町教育委員会 2002〕

丘陵下の山田川右岸扇状地上には富崎遺跡（10）があり、平成 16 年度に一般国道 472 号道路改築改良工事に先立つ試掘確認調査を実施した。その結果、竪穴住居跡や土坑などを確認し、弥生時代後期後半～終末期の土器が出土している。

古墳時代の遺跡としては、北西 900mに勅使塚古墳（5）がある。平成 10 年度に、財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所によって試掘調査が行われた。その結果から、全長 66m、高さ 8.8mを測り、出土した土器から県内最古級の大型前方後方墳であることが確認されている。〔富山県文化振興財団 2003〕

北西 1.3 kmには全長 58m、高さ 7.6mの王塚古墳がある。発掘調査は実施されていないが、墳丘の形態、立地などから判断して、勅使塚古墳に後続する時期であると考えられている。

南方 1.5 kmの富崎丘陵上には富崎千里古墳群（9）がある。平成 12 年度に試掘確認調査を実施し、前方後方墳 1、円墳 1、方墳 15 基からなる古墳群であることが確認されている。〔婦中町教育委員会 2002〕

これらの遺跡群のうち、王塚古墳・勅使塚古墳・千坊山遺跡・六治古塚墳墓・向野塚墳墓・富崎墳墓群・富崎千里古墳群の 7 遺跡は、地域の弥生時代から古墳時代への移り変わりを示す遺跡が良好に保存されている県内でも代表的な例であると評価され、平成 17 年 3 月「王塚・千坊山遺跡群」として国史跡に追加指定された。

本遺跡の西方 300mの丘陵斜面にある鏡坂墳墓群（25）は、平成 12 年度に試掘確認調査を実施し、1 号墓は一辺 24.1m、高さ 4.8m、2 号墓は一辺 13.7m、高さ 3mを測る、大小 2 基からなる弥生時代終末期の四隅突出型墳丘墓であることが確認された。立地や出土遺物の時期から、弥生時代における当遺跡の墓域ではないかと推測されている。〔婦中町教育委員会 2002〕

第 3 章　調査の概要

第1節　基本層序（第 10 図）

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、部分的に見られる堆積や撹乱、小規模な遺構埋土を除き、大まかに以下のように 5 層に分けることができる。今回の調査では、V層上面で遺構の検出を行なった。

Ⅰ層：黄灰色粘質土（表土、耕作土）層厚 20～30 cm
Ⅱ層：褐灰色＋褐色土、鉄分多く含む（耕盤土）層厚 0～10cm
Ⅲ層：黒褐色粘質土（遺物包含層）層厚 0～20 cm
Ⅳ層：褐灰色シルト（遺物包含層）層厚 0～30 cm
Ⅴ層：黄灰褐色シルト（地山）

第2節　遺構及び遺物

(1)遺構（第 10 図、図版 14･15）

調査区全体で古代の土坑 1 基、近世～近代の溝 1 本、時期不明のピット 2 基を検出した。

SK05　調査区北壁で切られており全容は不明であるが、長軸 0.9m、短軸 0.28m、深さ 0.3mを測る。西に向かって深くなっている。遺構埋土は、こぶし大の礫数個と炭化物が混じり、黒褐色を呈する。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。9世紀後半から10世紀代と考えられる。

SD03　調査区を南北に貫いている。検出長2.24m、幅0.5～0.9m、深さ0.15mを測る。断面は台形を呈する。出土遺物はないが、近世の遺物包含層を掘りこんでおり、近世・近代に属すると判断した。

SP01　直径0.25mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面はU字形を呈する。遺構埋土は地山と区別がつきにくい。出土遺物はないが、SD03と類似する遺構埋土であることから、近世・近代に属すると判断した。

SP02　直径0.3mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mを測る。断面は台形を呈する。遺構埋土は地山と区別がつきにくい。出土遺物はないが、SD03・SP01と類似する遺構埋土であることから、近世・近代に属すると判断した。　(細辻)

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	断面形態	出土遺物	備考
SP01	円形	0.25	0.25	0.2	U字形	—	
SP02	円形	0.3	0.3	0.2	台形	—	
SD03	直線	2.24 (検出長)	0.5～0.9	0.15	台形	—	調査区北壁・南壁に切られる
SK05	不明	0.9 (検出長)	0.28 (検出長)	0.3	不整形	須恵器・土師器	調査区北壁に切られる

表5　遺構一覧表

(2)遺物　(第11図、図版16)

須恵器、土師器、中世土師器、近世陶磁器がコンテナに換算し2箱出土した。

SK05　1は須恵器である。小型壺の底部と考えられる。内面は強いロクロナデ、外底面はヘラ切り後ナデ調整される。2は土師器の碗と考えられる。口径12.6cmで、内外面ロクロナデが施されている。3は土師器碗の底部で、外底面には回転糸切り痕がみられる。内外面とも調整は不明である。9世紀後半～10世紀代に位置付けられると考えられる。

包含層　4は須恵器で、甕の口縁部である。口径は36.8cmである。6・7は中世土師器皿で、非ロクロ製品である。5は越中瀬戸の皿である。削出高台で、体部上半に灰釉が施されている。　(久保)

番号	出土地点	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土		焼成	色調 内面	色調 外面	成形・調整 内面	成形・調整 外面	備考
1	SK05	須恵器・杯	—	—	8.8	密	1mm少量	やや悪	N7/　灰白色	N7/　灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	SK05	土師器・碗	12.4	—	—	密		悪	7.5YR8/6淡黄橙色	7.5YR8/6淡黄橙色	ナデ	ナデ	
3	SK05	土師器・碗	—	—	6.4	密		良	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	包含層	須恵器・甕	36.8	—	—	密	1mm少量	良	N8/灰白色	N8/灰白色	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	包含層	越中瀬戸・皿	—	—	4.7	やや粗		良	7.5YR7/3にぶい橙色	5YR8/4にぶい橙色	ロクロナデ	ケズリ+ナデ	
6	包含層	中世土師器・皿	13.0	—	—	密		良	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	ナデ	ナデ	
7	包含層	中世土師器・皿	13.8	—	—	密		良	2.5Y8/3淡黄色	2.5Y8/3淡黄色	ナデ	ナデ	

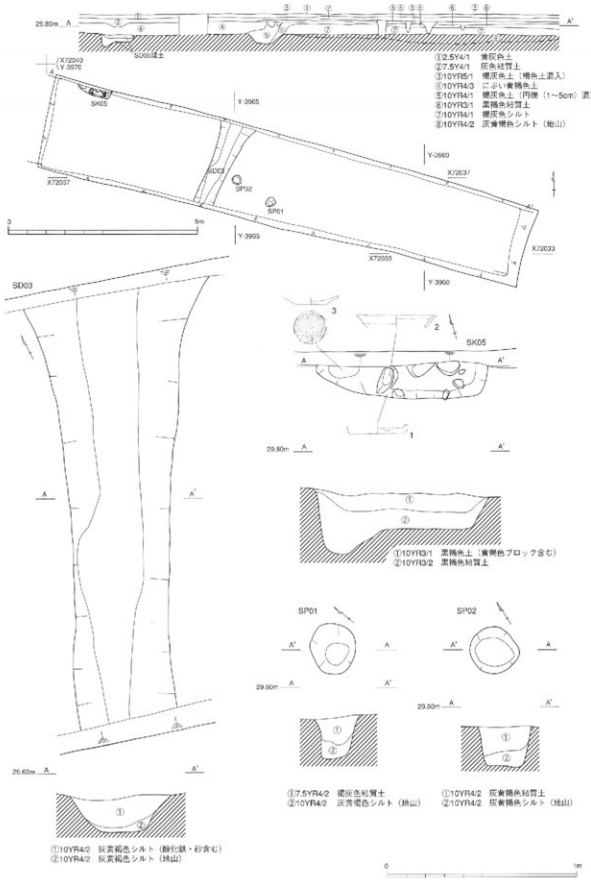
表6　遺物観察表

第4章　総括

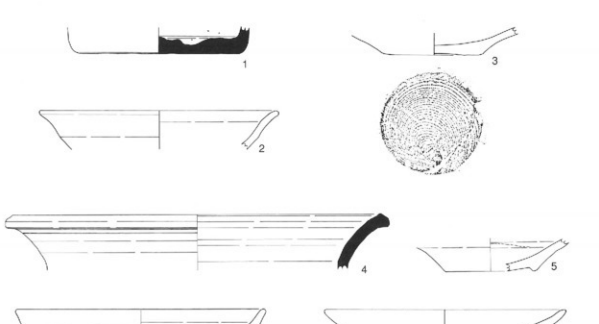
今回の調査では、面積が23.7㎡と狭小であったこともあり、確認した遺構も遺物もごくわずかであった。時期がわかる遺物を包含した遺構はSK05のみであり、詳細を考察するのは難しい。

SK05に似た性格の遺構調査例として、平成13年度に調査を実施したSK432を提示する。SK432は、SK05の50m南東に位置する。長軸2.2m、短軸1.8mの楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土はこぶし大の礫と炭化物を含んで黒褐色を呈する。出土遺物は須恵器、土師器、鉄滓、砥石、焼土がある。須恵器につまみの無い蓋があり、時期は10世紀代である。遺物出土状況は、ほぼ埋土上部に集中する。遺物等を廃棄し、一気に埋めたと考えられる。SK05も9世紀後半から10世紀代の遺物が遺構埋土上部に集中しており、こぶし大の礫が数個混入している。このことからSK432と同じ時期に同じ用途、つまり製鉄関連の目的で作られたのではないかと考える。

他の遺構は、断面観察では近世陶器等を含む層を掘り込み、近世・近代に属すると考える。(細辻)



第10図　調査区全体図及び北壁土層図（1/100）・遺構平面図及び遺構断面図（1/20）



第11図　出土遺物実測図（4は1/4、その他は1/2）

＜引用・参考文献＞

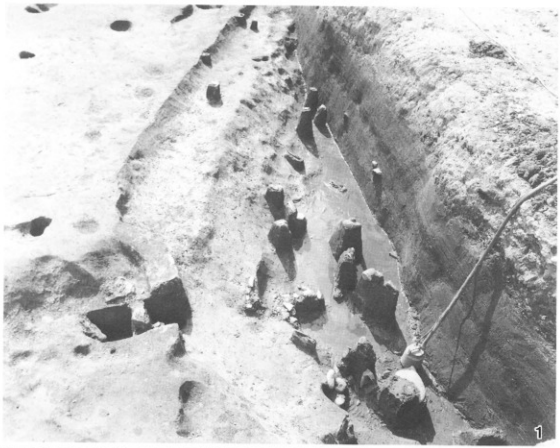
安藤弘道 1999「「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題　―シンポジウム『長野県の弥生土器編年』に参加して―」『長野県考古学会誌　92』長野県考古学会
石川県立埋蔵文化財センター1994『金沢市戸水Ｂ遺跡』
石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター2002『金沢市戸水Ｂ遺跡Ⅱ』
石川日出志 1990「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学　第3号』
石川日出志 2000「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古　第11号』新潟県考古学会
石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学　第120号』
射水市教育委員会 2006『作道遺跡発掘調査報告』
鹿島昌也 2001「遺跡から見た天文期の神保氏再興過程　～鶯野城跡と富山市北東部の中世城館跡から～」『日本海文化研究所所報33号』
金沢市教育委員会 1988『金沢市磯部運動公園遺跡』
金沢市教育委員会・(株)本謙建設 1992『金沢市専光寺養魚場遺跡』
上市町教育委員会 1984『北陸自動車道遺跡調査報告　―上市町木製品・総括編―』
河合忍 1996「北陸弥生土器様式の変革過程　―器種・用途別の計量分析を中心として―」『石川考古学研究会々誌　第39号』石川考古学研究会
河合忍 2000「弥生時代中期後半における土器交流システムの変革とその背景―北陸における凹線文系の土器の分析を中心として―」『石川考古学研究会々誌　第43号』石川考古学研究会
小松市教育委員会 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2003『富山県ボランティア埋蔵文化財保護活動事業発掘体験講座　婦負郡婦中町勅使塚古墳・中新川郡上市町永代遺跡・東砺波郡福野町安居窯跡群・射水郡小杉町中山中遺跡　発掘調査報告』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』
上越市教育委員会 2006『吹上遺跡　―主要地方道上越新井線関係発掘調査報告書Ⅰ―』
高岡市教育委員会 2001『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告　―都市計画道路下伏間江福田線築造に伴う平成9・10年度の調査―』
立山町教育委員会 1987『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 1981『飯野新屋遺跡発掘調査概報』
富山市教育委員会 1995『富山市宮町遺跡発掘調査現地説明会　資料』
富山市教育委員会 1997『富山県富山市水橋荒町遺跡』
富山市教育委員会 1998『富山市高島島浦遺跡・針原中町Ⅰ遺跡・針原中町Ⅱ遺跡』
富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999『富山市水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ』
富山市教育委員会 2000『富山市小西北遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2001『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2002『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2005『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2005『富山市水橋専光寺遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2006『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
富山市教育委員会 2006『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ』
富山県教育委員会 1994『富山県埋蔵文化財センター年報　平成5年度』
富山県教育委員会 1995『富山県埋蔵文化財センター年報　平成6年度』
富山県教育委員会 1996『富山県埋蔵文化財センター年報　平成7年度』
富山県教育委員会 1997『富山県埋蔵文化財センター年報　平成8年度』
富山県教育委員会 1998『富山県埋蔵文化財センター年報　平成9年度』
富山県教育委員会 2003『富山県埋蔵文化財センター年報　平成13年度』
富山県教育委員会 2004『富山県埋蔵文化財センター年報　平成15年度』
富山県教育委員会 2005『富山県埋蔵文化財センター年報　平成16年度』
富山県教育委員会 2006『富山県埋蔵文化財センター年報　平成17年度』
新潟県考古学会編 1999『新潟県の考古学　第3章　弥生時代・古墳時代』
久田正弘 1999「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌　92』長野県考古学会
福岡町教育委員会 1998『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』
婦中町教育委員会 2000『富山県婦中町外輪野1遺跡・鏡坂1遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町千坊山遺跡群試掘調査報告』
婦中町教育委員会 2003『富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告』
古川知明 1995「最新の発掘成果から」『富山市考古資料館報No.27』
古川知明 2000「8　宮町遺跡・9　小西北遺跡」『大境第20・21号創立50周年記念合併号　特集　道路遺構集成』富山考古学会
増山仁 1989「小松式土器の再検討　―小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して―」『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会

調査地付近の航空写真　（上＝2000年国土地理院撮影　下＝1946年米軍撮影）

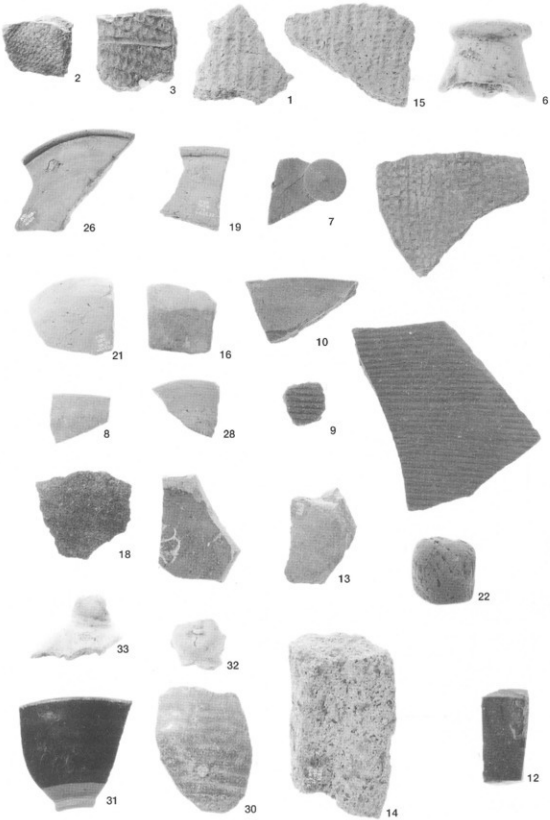
図版4　水橋専光寺遺跡

上＝調査区全景（北から）　下＝SD01完掘（東から）



1.SD01遺物出土状況（東から）　2.木製品出土状況（南から）　3.漆器出土状況（南から）
4.SD02遺物出土状況（北東から）　5.SE27完掘（西から）

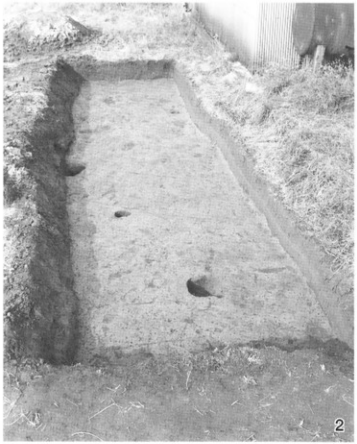
図版6　水橋専光寺遺跡

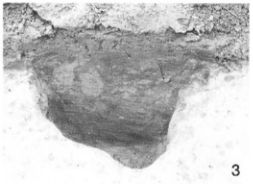


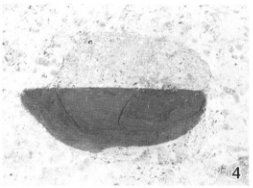
出土遺物

調査区付近の航空写真　（上＝2000年国土地理院撮影　下＝1946年米軍撮影）

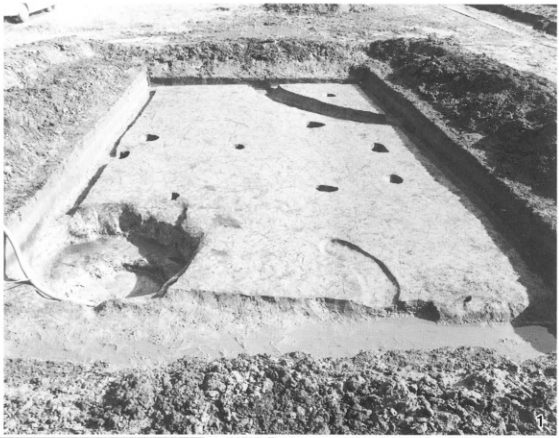
図版8　宮町遺跡

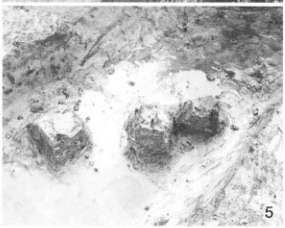






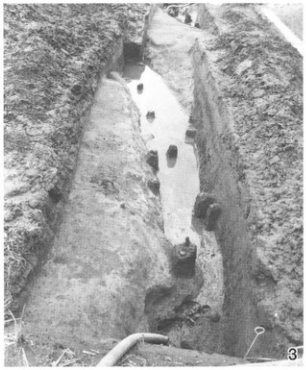
1.調査区空中写真　2.B区完掘（南から）　3.SP03断面（東から）　4.SP01断面（東から）





1.A区完掘（西から）　2.SE19完掘（東から）　3.遺物出土状況（北から）　4.SD17完掘（南西から）
5.遺物出土状況（西から）

図版10　宮町遺跡

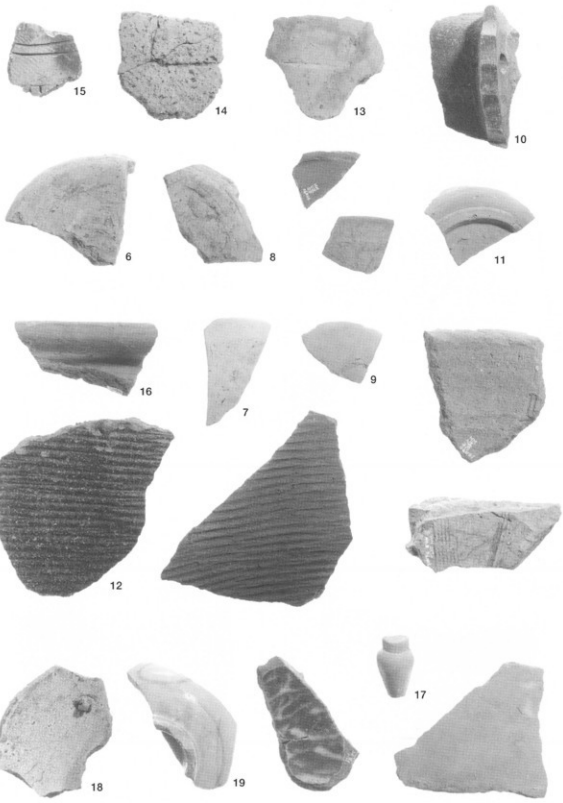


1.C区完掘（西から）　2.C区完掘（東から）　3.SD10完掘（東から）　4.SD10断面（北西から）
5.SD15完掘（東から）　6.SD15断面（西から）

(3)　(1)

SE19出土遺物（　）内は実測図番号

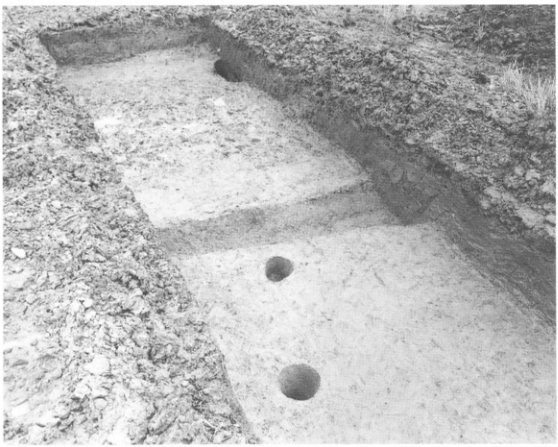
図版12　宮町遺跡



出土遺物

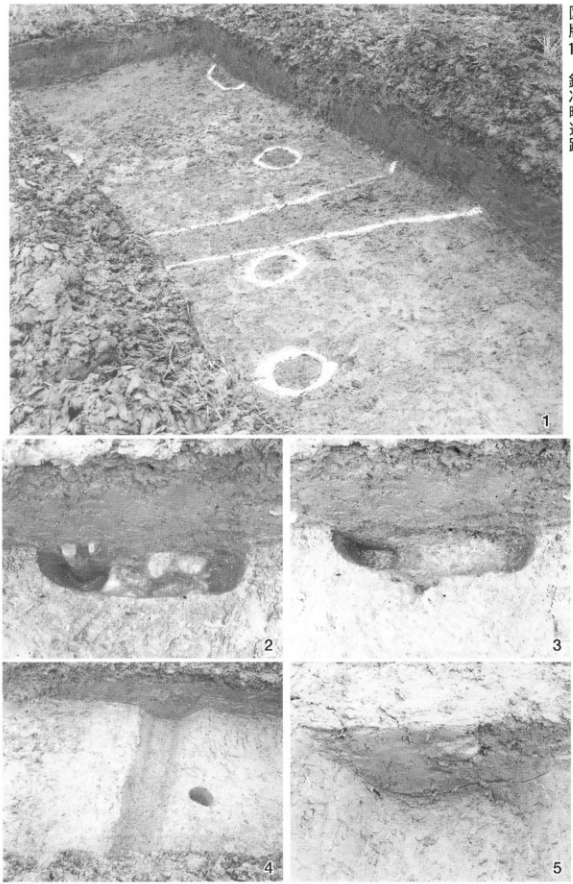
調査区付近の航空写真（上＝2000年国土地理院撮影　下＝1946年米軍撮影）

図版14　鍛冶町遺跡



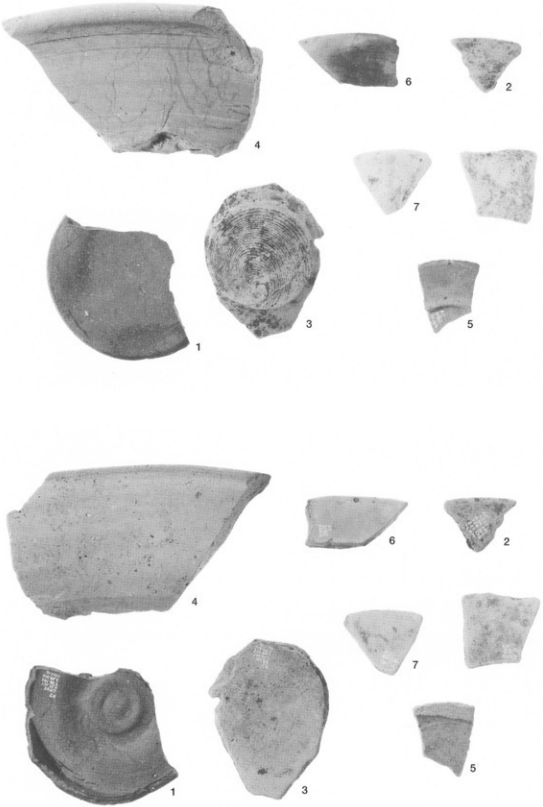
上＝調査区完掘（東から）　下＝遺構検出部ブロック（東から）

図版15　鍛冶町遺跡



1.遺構検出状況（東から）　2.SK05遺物出土状況（南から）　3.SK05完掘（南から）
4.SD03完掘（南から）　5.SD03断面（北から）

図版16　鍛冶町遺跡



出土遺物　（上＝表面　下＝裏面）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいよう に
書名	富山市内遺跡発掘調査概要 Ⅱ
副書名	水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・鍛冶町遺跡
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	20
編著者名	細辻嘉門・久保浩一郎
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
編集機関住所	〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL. 076-442-4246
発行年月日	西暦 2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みずはしせんこうじ 水橋専光寺遺跡	富山市水橋 上条新町地内	16201	201230	36度 43分 44秒	137度 19分 3秒	平成18年6月14日 ～7月5日	164	個人住宅建築
みやまち 宮町遺跡	富山市宮町地内	16201	201210	36度 43分 44秒	137度 15分 31秒	平成18年10月30日 ～11月30日	103.5	
かんこまち 鍛冶町遺跡	富山市舟橋中町 兵沢地内	16201	362150	36度 38分 56秒	137度 7分 20秒	平成18年12月 11日～15日	23.7	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水橋専光寺遺跡	集落	奈良・平安 中世・近世	溝・井戸・土坑・ピット	縄文土器・十師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越中瀬戸・近世陶磁器 木製品・漆器・石製品	

要約	古代～近世の遺構が検出された。調査区北東端の溝は、過去の調査で検出された河川跡とつながる。縄文土器、古代土師器・須恵器、中世土師器、近世陶磁器、漆器が出土し、長期間、河川であったと考えられる。 中世の井戸からは、中世土師器と被熱を受けた礫が出土した。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮町遺跡	集落 ・館	弥生中期・ 奈良・平安 中世・近世	井戸・溝・土坑・ピット	弥生土器・十師器・須恵器・珠洲・ 中世土師器・近世陶磁器・木製品	

要約	弥生時代中期後半の井戸・後期初頭の溝、中世～近世の遺構を確認した。 弥生時代中期後半の井戸からは底部のみ欠損した甕と、底部のみのものが出土し、井戸を廃棄する際に、なんらかの祭祀を行ったと考えられる。 溝からは東北地方の影響がある天王山系の土器が出土した。 中世から近世の溝は、2条がほぼ平行し、同じような規模である。十層観察から新旧時期差があり、傍に新しく掘り直す必要があったと考えられる。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶町遺跡	集落	奈良・平安 中世・近世	溝・土坑・ピット	十師器・須恵器・中世土師器・近世陶磁器	

要約	古代～近世の遺構を確認した。調査区北西端の土坑からは、須恵器・十師器が出土した。9世紀後半から10世紀代と判断される。調査区中央には、南北に走る溝を検出した。堆積状況から、近世以降に所属する。遺物の年代は、古代から近世にわたる。

富山市埋蔵文化財調査報告 20

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ

—水橋専光寺遺跡・宮町遺跡・総曲輪遺跡—

発行日：2007（平成 19）年 3 月 30 日

発　行：富山市教育委員会

編　集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山市愛宕町 1 丁目 2 番 24 号

ＴＥＬ：076-442-4246

ＦＡＸ：076-442-5810

Email：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印　刷：宮田印刷　富山市八尾町東町 2215